

# 英訳『方丈記』の比較

——「心情語」を中心に——

伊 波 美の里

## はじめに

鴨長明が記した随筆『方丈記』は、日本の三大随筆の一つである。私が初めて手にした英訳『方丈記』は、サドラーの訳であった<sup>(1)</sup>。『方丈記』に初めて触れる読者がこの英訳を理解できるのか疑問に思った。英訳者はどのような意図をもって『方丈記』の英訳にあたったのだろうか。

英訳『方丈記』の比較は、矢部義之<sup>(2)</sup>、森川隆司<sup>(3)</sup>、坂本文利<sup>(4)</sup>らが既に行っているが、これらの先行研究では、文法や語の構造に注目して分析している。本稿では、英訳者が『方丈記』をどのように解釈し、英訳したのかを明らかにするために、心情語に注目する。『方丈記』には、筆者である鴨長明、もしくは長明が目にした人物の心情が鮮やかに描かれており、心情語は『方丈記』を読み解く上で重要である。心情語を手掛かりに、9種の英訳『方丈記』を比較し、英訳者が『方丈記』をどのような作品として捉えていたか、何に注目して訳したかを考察する。

## 1. 英訳された『方丈記』

### I 夏目漱石訳

夏目漱石は明治24年（1891）、東京帝国大学教授のジェームズ・メイン・ディクソン（James Main Dixon）<sup>(5)</sup>の依頼で『方丈記』を英訳した<sup>(6)</sup>。さらにディクソンが手を加え、明治26年（1893）“Transactions of the Asiatic Society of Japan”に‘A Description of My Hut’としてディクソンの名で掲載された<sup>(7)</sup>。本稿における研究対象は、明治24年（1891）に漱石が訳した『方丈記』である<sup>(8)</sup>。以下、[訳 a（漱石）]とする。[訳 a（漱石）]は、『方丈記』の英訳部と、『方丈記』の作品観および作者紹介に分かれている。「五大災厄」は、“not essential to the true purpose of the piece”と要約のみ記されている。また、日本語の構造を留めるよう苦心したが一部で省略や挿入を行ったこと、文学的完成度を追求していないことが記されている<sup>(9)</sup>。

### II アストン訳

ウィリアム・ジョージ・アストン（William George Aston）は1864年に来日し、日本語

書記官などとして働く傍ら、『竹取物語』や『土佐日記』の英訳を手掛けた<sup>(10)</sup>。1899年にはロンドンの Heinemann 社から、“A History of Japanese Literature”を刊行した。同書は、日本文学史の概説と、日本文学作品の英訳を掲載している<sup>(11)</sup>。序文には、日本語研究や翻訳は不十分であり、日本文学はヨーロッパの学生にはほとんど学ばれていないと書かれている<sup>(12)</sup>。本稿で扱う『方丈記』の英訳は“A History of Japanese Literature”に収められている、Chomei and the “Hojoki” (Book the fourth, Chapter III p.149-156) である。鴨長明の生涯と『方丈記』の概要、『方丈記』の抄訳から成るこの英訳を、[訳 b (アストン)] と呼ぶ。

### III 南方熊楠およびディキンズ訳

南方熊楠は1892年(明治25)に渡英し、翌年には論文が科学雑誌“Nature”に掲載された。1900年(明治33)、実家からの仕送りを絶たれたために帰国。1903年(明治36)、ディキンズの勧めで『方丈記』の翻訳に着手し、翌年に仕上げた<sup>(13)</sup>。ディキンズは1866年にイギリスの出版社から「世界初の日本文学の英訳本」<sup>(14)</sup>である“Hyak Nin Is’shiu”を出版した。1882年ロンドン大学事務局長に就任し、このころ南方熊楠と親交を結んだ。1905年、“The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland”に‘A Japanese Thoreau of the Twelfth Century’として熊楠との共訳の『方丈記』を発表した<sup>(16)</sup>。

1904年の熊楠単独の英訳は、手書きの草稿が残されているが、現存するのは全24頁中の12頁分のみである。本稿では、翻字された「南方熊楠『方丈記』草稿」<sup>(17)</sup>を用い、以下[訳 c (熊楠)] と呼ぶ。1905年に共訳された英訳『方丈記』は、[訳 c (熊楠)] にディキンズが手を加えている。同訳を、以下は[訳 c' (熊楠、ディキンズ)] と表す。[訳 c' (熊楠、ディキンズ)] には、次の記述がある。

In Dr. Aston's "History of Japanese Literature" a translation of part of these "Notes" will be found. Another version—to my mind very imperfect—has been published, I found, in the Trans. of the As. Soc. of Japan of 1892.

[訳 b (アストン)] の存在を認知していたことが示されている。また、“to my mind very imperfect” と評されているのは、“Transactions of the Asiatic Society of Japan”に掲載されたディクソン訳である。

### IV サドラー訳

アーサー・リンジー・サドラー (Arthur Lindsay Sadler) は1922年、シドニー大学の東洋学教授に就任し、シドニーの国立軍事大学で日本語教授も兼任した<sup>(18)</sup>。1928年、シドニーの Angus & Robertson 社から“The ten foot square hut and, Tales of the Heike”を出版した。『方丈記』の英訳部(“The Hojoki”)のみを本稿の考察の対象とし、1928年版が確認できなかったため、1972年にアメリカの Tuttle Publishing から出版された版を使用した。以下[訳 d (サドラー)] と表記する。Introduction には“A new version has been made of the Hojoki, since the excellent translation of F. V. Dikins has been long out of print.”とあり、ディクソン訳、[訳 c' (熊楠、ディキンズ)] を読んでいたことが示唆されている。

## V 板倉順知訳

“The Hō-jō-ki: private papers of Kamo-no-Chōmei of the ten foot square Hut” (板倉順知訳 大京堂 1935年) は、今回取り上げる英訳『方丈記』の中で唯一、挿絵を有する作品である。以下は〔訳 d (板倉)〕と記す。板倉順知の経歴は明らかでないが、築瀬一雄が「方丈記の外国語訳は頗る多く、私の知るものだけでも、英譯六種 (夏目漱石、J. M. Dixon, W. G. Aston, 南方熊楠と F. V. Dickens, A. L. Sadler, 板倉順知)」<sup>(19)</sup>と記していることから、板倉訳の存在は知られていたようである。販売所の中には外国客の利用が多い場所もある<sup>(20)</sup>。発行されたのは日本だが、海外の読者も想定していたと思われる。挿絵には、『方丈記』になじみの薄い読者の内容理解を助ける目的があったと推測される。

## VI キーン訳

ドナルド・キーン (Donald Keene) は、1942年海軍日本語学校に入学し、卒業後は戦地での翻訳・通訳を行った<sup>(21)</sup>。1955年、上代から近代までの日本文学を英訳した、“Anthology of Japanese literature” (『日本文学選集』) を刊行。今回考察対象とする『方丈記』は同書に収録されている、‘An Account of my Hut’ である。冒頭に長明の生涯の紹介と作品の解説がある。この英訳を、以下〔訳 f (キーン)〕と表す。キーンは「私の仕事は、特殊な人しか理解できない日本文学を、一般の外国人にも広めることだ。」と述べている。キーンは、英訳上の課題があることを理解したうえで、『方丈記』を読んだことのない海外の読者にも分かりやすい英文にすることを心がけていたと思われる。

## VII 上田守稔訳

1988年に出版された『英訳方丈記』は、上田守稔、合田守緒、ゴードン・マシューズ (Gordon Mathews) の3人による英訳である。『北海道短期大学研究紀要』に掲載された「『方丈記』試訳」(1982年9月)<sup>(24)</sup>および「『方丈記』試訳(続 その1) —他訳との比較研究—」(1984年9月)<sup>(25)</sup>をもとにしたようである。上田守稔は、北海道薬科大学の教員であった<sup>(26)</sup>。合田守緒は、1978年から1995年まで北海道自動車短期大学で教授を務め、主に文学を研究していた<sup>(27)</sup>。マシューズは、哲学の学士号、ESL (第二言語としての英語教育) の修士号をそれぞれ取得し、日本で英語教師をしていた<sup>(28)</sup>。この3人がどのような経緯で共訳をするようになったのかは明らかでない。しかし、『方丈記』を、「我国古典文学の一翼を担う代表作として海外へも紹介される」と評価し、「英米人への配慮から、内容・場面が大巾に変換する箇所は一行スペースを置いた」<sup>(29)</sup>と、読者に英米人も想定していることは確かである。1988年に出版された『英訳方丈記』を研究対象とし、以下は〔訳 g (上田ら)〕と表記する。〔訳 g (上田ら)〕は、読者が原文と比較しながら英訳を読むことを想定して、原文と英文の対訳の形式である<sup>(30)</sup>。また、既出の英訳を適宜参考にして訳している。「原文に即した平易な口語調の現代文を心掛けた」<sup>(31)</sup>そうだが、他の英訳と比較することで上田たちの英訳の特徴を際立たせることにもなるだろう。

## VIII 森口靖彦、ジェンキンス訳

森口靖彦は、渡米経験があり、哲学の学位を持つ人物である<sup>(32)</sup>。デイビッド・ジェンキンス (David Jenkins) は、ロンドンとアメリカでジャーナリスト、編集者をしたのち、1980年に来日した。英語講師をする傍ら、森口靖彦とともに日本中世文学の英訳を行い、“Kyoto Journal”<sup>(33)</sup>に『梁塵秘抄』、『閑吟抄』、『方丈記』の英訳を掲載した<sup>(34)</sup>。森口靖彦、ジェンキンス訳の『方丈記』は、1995年に“Kyoto Journal”に掲載された後、1996年にアメリカの Stone Bridge Press 社より“Hojoki: Visions of a Torn World”として出版された。5千部を出版し、日本とアメリカ、イギリスで発売された<sup>(35)</sup>。ジェンキンスは、鴨長明の人生と災害の克明な描写に興味を持ち、英語圏の人にも理解されるよう分かりやすいことばを使ったと述べている<sup>(36)</sup>。本稿では、2012年に刊行された『英語で読む方丈記 Visions of a Torn World』を考察対象とし、以下〔訳h (森口、ジェンキンス)〕と表記する。英訳本文は“Kyoto Journal”版、Stone Bridge Press 社版とほぼ異同がないが、同書は日本人向けの英語学習書であり、英語の文法解説なども付けられている。それらは森口およびジェンキンスが執筆・編集したものではないので、英訳のみを対象とする。

### 2. 翻訳の背景 一夏目漱石、南方熊楠を中心に一

夏目漱石と南方熊楠は、ともに1876年(慶応3)生まれである。本章ではこの2人を中心に、時代背景と『方丈記』の翻訳の経緯を考える。

古典文学の出版で特筆すべきは、1890年から翌年にかけて刊行された『日本文学全書』である。全24編からなり、『竹取物語』や『源氏物語』、『平家物語』などの古典作品を収録している。〔訳c (熊楠)〕の底本は『日本古典文学』第2編収録の『方丈記』だと思われる。

日本文学史を初めて西欧で紹介したのは、1899年にアストンが出版した“A History of Japanese Literature”である<sup>(38)</sup>。同書は第2章第2節でも触れたが、当時ヨーロッパでは日本文学の翻訳や研究は進んでいなかったようである。1964年に刊行された“Japanese literature in European languages: a bibliography supplement”によると、明治期に翻訳された作品は古典文学が中心であり、翻訳者は日本人、もしくは日本に長期間滞在していた外国人が多いようである<sup>(39)</sup>。

漱石および熊楠と『方丈記』との関わりを述べる。漱石自身は英訳前から『方丈記』への関心を持っていた<sup>(40)</sup>。以下は、翻訳の前年の明治23年(1890)、正岡子規に宛てた書簡の一部である。

知らず生まれ死ぬる人何方より来りて何かたへか去る又しらず仮の宿誰が為めに心を悩まし何によりてか目を悦ばしむると長明の悟りの言は記憶すれど悟りの実は迹方なし<sup>(41)</sup>(下線は引用者による。)

『方丈記』の冒頭「知らず、生まれ死ぬる人、何方より来たりて、何方へか去る。また、知らず、仮の宿り、誰がためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。」を「長明の悟りの言」として引用している。漱石にとって印象深い言葉であったのだろう。

また、南方熊楠は、1903年5月27日にディキンズから、『方丈記』を翻訳したいができないという旨の手紙を受け取り、すぐに翻訳に取り掛かっている。この点について、松居竜五は以下のように指摘している<sup>(42)</sup>。

ディキンズ側の考えとは別に、熊楠自身には自発的な動機づけとして「『方丈記』を翻訳したい」ということがあって、このことは（引用者注：ディキンズからの手紙）を受けて作業をはじめたのだらうと思われます。

熊楠が『方丈記』の翻訳をしていたのは、ロンドンからの帰国後であり、この時期の熊楠は苦境に立たされていた。海外では“Nature”に寄稿するなど才能が認められていたが、日本での地位は確立されておらず、実家からの支援もないため社会的に孤立していた。そのような中で、『方丈記』が心の支えとして大きな意味を持っていたようである<sup>(43)</sup>。

漱石、熊楠が『方丈記』を英訳したのは、外国人からの依頼が直接のきっかけであり、海外であまり研究されていなかった日本古典文学を海外および外国人へ紹介する目的があったと思われる。しかし、『方丈記』への共感や思い入れも各々にあり、英訳への内的動機も存在していたようである。

### 3. 各英訳の相違

英訳の比較をする前に、底本について述べる。『方丈記』には様々な写本・版本が伝えられている。記事の分量から広本と略本に分かれ、さらに内容・文章から、広本は古本と流布本の2系統に分けることができる<sup>(44)</sup>。略本は、広本に比べて分量が少ないことが特徴である。

古本系統で研究の中核となるのが、大福光寺本である。鎌倉時代の伝本であり、諸本の中で最も古い。現在のほぼ全ての注釈書が、この大福光寺本を底本にしている。各英訳の底本を、表1に掲げる。

〈表1〉英訳の底本一覧

[訳 a (漱石)]	流布本系統
[訳 b (アストン)]	流布本系統
[訳 c (熊楠)]	流布本系統
[訳 c' (熊楠、ディキンズ)]	流布本系統
[訳 d (サドラー)]	流布本系統
[訳 e (板倉)]	流布本系統
[訳 f (キーン)]	流布本系統
[訳 g (上田ら)]	古本系統 (大福光寺本) *前田家本 (古本系統)、一条兼良本 (流布本系統) による校訂
[訳 h (森口、ジェンキンス)]	古本系統

### 4. 「心情語」による比較

『方丈記』には、人々の心情、そして長明自身の心情が度々描かれている。心情語は

『方丈記』の解釈において重要な位置を占めると同時に、英語の単語と一対一で対応させられるものではない。心情語からは、「日本人がどのように内面世界を認識し、対象世界の中でどのように心情を言語に表現するのか」<sup>(45)</sup>を把握することができる。『方丈記』に記されている心情語を、英訳者はどのような心情だと解釈し、どのような英語の表現に置き換えたのかを分析する。

## 1 「心情語」とは

本稿では、「心的状態および心的動きを表す語」、つまり喜怒哀楽などの心情を表す語を心情語とする<sup>(46)</sup>。陳崗、吉田則夫は「形態からみた日本語心情語彙の史的展開—語構成と品詞の観点から—」において、上代、中古、中世、近世、近現代の時代区分のもとで心情語を収集している。同論文の上代、中古、中世における心情語を参考に、『方丈記』中から、私に心情語と定めた語を抽出した。さらにその中から、英訳者によって訳に揺れが見られる語を抽出し、以下のように分類した(表2)。

〈表2〉心情語の分類

無常を表す語	あだなり はかなし 無常
悲哀を表す語	憂ふ／愁ふ 憂へあふ 愁へ悲しむ おそれ 悲し 苦し 心うし／もの憂し 嘆く／嘆き 悩む
執着を表す語	執／執心 愛す 着す

## II 無常を表す語

無常を表す、「あだなり」「はかなし」および「無常」の英訳を比較する。英訳において心情語は明確に訳出されない場合もあるので、心情語を含む文単位での比較表を作成した(表3)。

まず、「無常」の訳を見してみる。[訳 a (漱石)]では、“in a state of perpetual change”、「絶え間なく変化する状態」としている。[訳 b (アストン)]は、“subject to change” (変化しやすい<sup>(47)</sup>)、[訳 c (熊楠、ディキンズ)]は“impermanence” (非永久)、[訳 g (上田ら)]は“transitory life” (はかない人生)と訳している。[訳 e (板倉)]は短命な動物という意味も持つ“ephemeral” (つかの間の)を用いている。また、[訳 f (キーン)]、[訳 d (サドラー)]、[訳 h (森口、ジェンキンス)]は「無常」に該当する語はなく、住人と

〈表3〉 無常を表す語の比較

原文	その主と栖と、 <u>無常</u> を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。	すべて、世の中のありにくく、わが身と栖との、はかなく、 <u>あだなる</u> さま、また、かくのごとし。
[訳 a (漱石)]	A house with its master, which passes away <u>in a state of perpetual change</u> , may well be compared to a morning-glory with a dew drop upon it.	Such are the evils of the world, <u>the instability</u> of life and of human habitations.
[訳 b (アストン)]	Of a house and its master I know not which is the more <u>subject to change</u> . Both are like dew on the convolvulus.	該当部なし (概要のみ)
[訳 c (熊楠)]	該当箇所現存せず	In general, such is the <u>unsound &amp; vain</u> state of our lives and dwellings.
[訳 c' (熊楠、ディキンズ)]	Dweller and dwelling are rivals in impermanence, both are fleeting as the dewdrop that hangs on the petals of morning-glory.	What is so hateful in this life of ours is its vanity and triviality, both with regard to ourselves and our dwellings, as we have just seen.
[訳 d (サドラー)]	Like the dew on the morning glory are man and his house, who knows which will survive the other?	Thus it seems to me that all the difficulties of life spring from this <u>fleeting evanescent</u> nature of man and his habitation.
[訳 e (板倉)]	Like the dew on the morning glory, both a host and his house pass away in this <u>transitory life</u> .	Thus then, it is easily ascertained that one's livelihood in this world is not always accord with one's will and that one's life and abode are <u>very uncertain</u> upon this earth.
[訳 f (キーン)]	Which will be first to go, the master or his dwelling? One might just as well ask this of the dew on the morning-glory.	All is as I have described it—the things in the world which make life difficult to endure, our own <u>helpless</u> and the <u>undependability</u> of our dwellings.
[訳 g (上田ら)]	The people and their houses are no less <u>ephemeral</u> than the drops of water on the morning glory.	You can see from all this that our world is a very difficult place to live in and that our bodies and houses are <u>unreliable and ephemeral</u> .
[訳 h (森口、ジェンキンス)]	A house and its master are like the dew that gathers on the morning glory.	So as we see our life is hard in this world. We and our houses <u>fleeting, hollow</u> .

\* 心情語とそれに対応する英訳には——もしくは——を引いた。〈表4〉〈表5〉も同様。

その家を朝顔に宿る露に例えているのみである。「無常を争ふ」という表現が示す具体的状況が分かりづらいため、あえて「無常」を訳出しなかったと思われる。

次に、「はかなし」と「あだなり」の英訳を比較する。[訳 a (漱石)] では、2 語をまとめて“instability” (不安定さ) としている。[訳 c (熊楠)] および [訳 c' (熊楠、ディキンズ)] は、ともに 2 語を並べている。前者は“unsound & vain” (不安定でむなし)、後者は“vanity and triviality” (はかなくささいなこと) と vain/vanity が共通して用いられている。[訳 d (サドラー)] は“fleeting evanescent” (つかの間で一過性の) と訳しているが、[訳 h (森口、ジェンキンス)] でも“fleeting, hollow” (つかの間でむなし) と、共に fleeting が使われている。fleet は文語的な語であり、『方丈記』が古典文学であることを踏まえた訳だと考えられる。[訳 e (板倉)] は“very uncertain” (かなり不確かな) と訳し、心情ではなく、uncertain という状況を表している。[訳 f (キーン)] は“helpless and the undependability” (無力で不確実)、[訳 g (上田ら)] は“unreliable and ephemeral” (頼りなくはかない) と、「はかなし」を頼りないという意味で解釈している。また、[訳 g (上田ら)] は、「無常」と同様に ephemeral を用いており、「はかなし」「あだなり」と「無常」を明確に区別していない。

### III 悲哀を表す語

悲哀を表す語は、五大災厄についての記述があるためか、語数および出現回数も多い。本稿では、「嘆き」および「嘆く」に注目して比較した (表 4)。

「この風、未の方に移りゆきて、多くの人の嘆きをなせり。」の「嘆き」は多様に訳されている。[訳 a (漱石)] と [訳 h (森口、ジェンキンス)] は死別・苦痛などによる深い悲しみを表す grief を用いている。災害による人の死や住居への被害による悲しみを grief と表しているのだろう。[訳 b (アストン)] は旧約聖書における哀歌や嘆き悲しむという意の lamentation、[訳 d (サドラー)] は悲嘆および苦痛という意味の distress、[訳 f (キーン)] は嘆き悲しむ意の bewail を用いている。これらは人々が嘆き悲しむ声が聞こえてくるような訳であり、特に [訳 d (サドラー)] は“shouts of distress” と明確に示されている。[訳 e (板倉)] は、人の死や失望に対する悲しみを表す sorrow を用いている。sorrow は、詩において涙を意味し、悲しみによって人々が涙を流す様子までも想起させる。また、[訳 c' (熊楠、ディキンズ)] は“do much harm”、[訳 g (上田ら)] は misfortune と、心情ではなく大風の被害について述べている。両者の訳では、「嘆き」という語を訳すのではなく、嘆く対象のみを明らかにしている。嘆く対象が原文中には明確に記されていないために、このような英訳をしたと考えられる。

では、嘆く対象が明らかにされている場合はどのように訳されているのか。「今移れる人は、土木のわづらひある事を嘆く。」の場合は「土木のわづらひ」と、嘆く対象が明記されている。[訳 c' (熊楠、ディキンズ)] は、“the newcomers had to live amid the unpleasant bustle of construction”、[訳 g (上田ら)] “The newcomers complained that they were having a hard time trying to build their houses” と訳している。[訳 g (上田ら)] では、「嘆く」を不満を言うという意味の complained と訳している。しかし、[訳 c' (熊楠、ディキンズ)]



〈表4〉 悲哀を表す語の比較

原文	この風、未の方に移りゆきて、多くの人の嘆きをなせり。	今移れる人は、土木のわづらひある事を嘆く。
[訳 a (漱石)]	It traveled toward the south-west much to <u>the grief</u> of living there.	該当部なし (概要のみ)
[訳 b (アストン)]	This wind passed off in a south-westerly direction, having caused <u>lamentation</u> to many.	該当部なし (概要のみ)
[訳 c (熊楠)]	該当箇所現存せず	該当箇所現存せず
[訳 c' (熊楠、ディキンズ)]	The wind finally veered towards the goat and ape quarter [south-east] and <u>did much harm</u> in that region.	…the newcomers had to live amid the unpleasant bustle of construction.
[訳 d (サドラー)]	This whirlwind eventually veered round to the south-west and fresh shouts of distress arouse.	…the new inhabitants <u>grumbled</u> at the difficulty of building on such a site.
[訳 e (板倉)]	This dreadful wind blew off towards the south-west and brought much <u>sorrow</u> to a great many of the inhabitants.	…the new comers were <u>anxious</u> to level off the ground and to build their houses.
[訳 f (キーン)]	The whirlwind moved off in a southwesterly direction, leaving behind many to bewail its passage.	…those who now moved there <u>complained</u> over the difficulties of putting up houses.
[訳 g (上田ら)]	In the course of time the whirlwind veered round to the south-west, the central part of the city, bringing new <u>misfortune</u> to many more people.	The newcomers <u>complained</u> that they were having a hard time trying to build their houses.
[訳 h (森口、ジェンキンス)]	Then the wind moved south and caused more <u>grief</u> .	Those moving there <u>sighted</u> at the chore of having to build anew.

では「嘆く」に対応する語はなく、意識されている。原文を直訳しただけでは読者に理解されないと考えたために、表現に手を加えたと思われる。

#### IV 執着を表す語

執着を表す語の中から、「愛す」「執心」に注目して英訳を比較する(表5)。

「今、さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。」の「愛す」の訳は大きく分けて2つのパターンがある。1つ目は、直訳である。[訳 e (板倉)]、[訳 f (キーン)]、[訳 g (上田ら)]、[訳 h (森口、ジェンキンス)] がこれに該当し、愛着があるという意味の attached を用いた [訳 g (上田ら)] 以外は、love/lovely が「愛す」に該当する。2つ目は、庵での生活を楽しむと意識しているものである。[訳 a (漱石)]、[訳 c (熊楠)]、

〈表5〉執着を表す語の比較

原文	今、さびしきすまひ、 一間の庵、みづからこ れを愛す。	今、草庵を愛するも とがとす。閑寂に <u>着する</u> も障りなるべし。	仏の教へ給ふおもむき は、事に触れて執心な かれとなり。
[訳 a (漱石)]	I <u>enjoy the peace of</u> <u>mind</u> in this lonely place, in this small cottage.	To <u>love</u> this mossy hut is still a sin: <u>tried</u> tran- quility is certainly an obstruction to salvation.	Buddha teaches us to <u>love no earthly things.</u>
[訳 b (アストン)]	該当部なし	Even my <u>love</u> for this thatched cabin is to be reckoned a transgression; even my <u>lying down</u> to quiet rest must be a hindrance to piety.	Buddha has taught man- kind <u>not to allow their</u> <u>heartstobecomeenslaved</u> <u>by outward things.</u>
[訳 c (熊楠)]	Contrariwise this present forlorn residence in a single-celled hut I can <u>enjoy to my bosoms full.</u>	So then even to <u>endear</u> this hut thatched with hay is deemed a sin, and even to <u>love</u> this calm life should be a hindrance.	For what Buddha instruc- ted mankind is principally this, that is, <u>not to be</u> <u>stubborn in attaching</u> <u>one's mind to a particu-</u> <u>lar contingent matter.</u>
[訳 c' (熊楠、ディ キンズ)]	in the solitary cabin I know is <u>full of joy.</u>	So 'tis a sin even to <u>grow</u> <u>fondofthisstraw-thatched</u> <u>cabin,</u> and to <u>findhappiness</u> in this life of peace is a hindrance to salvation.	What the Buddha has taught to men is this— <u>Thou shalt not cleave to</u> <u>any of the things of this</u> <u>world.</u>
[訳 d (サドラー)]	With this <u>lovely</u> cottage of mine, this hut of my room, I am quiet content.	the <u>affection</u> I have for this thatched hut is in some sort a sin, and my <u>attachment</u> to this solitary life may be a hindrance to enlightenment.	The Law of Buddha teaches that we should <u>shun all clinging to the</u> <u>world of phenomena,</u>
[訳 e (板倉)]	This <u>lovely</u> abode, this one room hut, is to me a most pleasant place.	Perhaps to <u>love</u> this that- ched cottage and to <u>cleave</u> to this solitary way of life are sins to be blamed.	Buddha says unto us that we shall not <u>attach</u> <u>ourselves to any earthy</u> <u>things.</u>
[訳 f (キーン)]	This lonely house is but a tiny hut, but I <u>somewhat</u> <u>love</u> it.	It is sin for me now to <u>love</u> my little hut, and my <u>attachment</u> to its solitude may also be a hindrance to salvation.	The essence of the Bud- dha's teaching to man is that we must not have <u>attachment for any object.</u>
[訳 g (上田ら)]	My present solitary abode is only a one-room hut, but I am deeply <u>attached</u> to it,	I am afraid my <u>attachment</u> to my hut and my desire for solitary life will pre- vent me from dying a peaceful death.	Buddha taught us to <u>be</u> <u>detached from earthly</u> <u>desire of all kinds.</u>
[訳 h (森口、ジェ ンキンス)]	I <u>love</u> my lovely dwelling, this one-room hut.	Yet the way I <u>love</u> this hut is itself attachment. To be <u>attached</u> to the quiet and serene must likewise be a burden.	Buddha taught we <u>must</u> <u>not be attached.</u>

[訳 c' (熊楠、ディキンズ)] がそうであり、enjoy もしくは joy を用いている。

「今、草庵を愛するもとがとす。閑寂に着するも障りなるべし。」の「愛す」については、[訳 a (漱石)]、[訳 b (アストン)]、[訳 e (板倉)]、[訳 f (キーン)]、[訳 h (森口、ジェンキンス)] は love としている。[訳 g (上田ら)] は先ほどと同様、attachment を用いている。[訳 c (熊楠)] の endear (愛しく思う)、[訳 c' (熊楠、ディキンズ)] の fond of (好む)、[訳 d (サドラー)] の affection (愛着) も直訳である。「今、さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。」においては、庵での生活を楽しむと訳される場合があったが、「今、草庵を愛するもとがとす。」では庵を愛すると直訳されている。

「執心」は原文中で「執心なかれ」という形で書かれている。[訳 c' (熊楠、ディキンズ)] では、私の言葉であるとして “Thou shalt not cleave” と、Thou や shalt という現代では使われない古めかしい単語を用いて表現している。また、[訳 b (アストン)] は “not to allow their hearts to become enslaved by outward things” (外部のものに心を囚われることを許すな)、[訳 c (熊楠)] “not to be stubborn in attaching one’s mind to a particular contingent matter” (不確かな物事に心ひかれるということに頑なになってはいけない) と回りくどい表現である。他の訳では直訳に近い形で訳しているが、[訳 g (上田ら)] は “detached from earthly desire of all kinds” (すべての現世での望みから離れる) と detached を用いて、執着の原因である現世的な願望からの離脱と表現しているのが特徴的である。

## 5. 英訳者の『方丈記』解釈

本章では、各英訳者の翻訳の特徴や、『方丈記』の解釈を考える。

[訳 a (漱石)] は、心情語 1 語と英単語 1 語が対応する場合が多いが、「はかなし」と「あだなり」をまとめて “instability” と訳すなど、完全には対応していない。また、「愛す」と「執心」を、ともに “love” としており、原文における言葉の選択を英訳に反映できていない。さらに、五大災厄を重要な部分でないと訳していない。ただし、漱石の書簡や著作には『方丈記』の影響がみられる。漱石は『方丈記』に描かれる事柄や表現そのものよりも、長明の思想に関心があったのだろう。一方 [訳 h (森口、ジェンキンス)] の “Visions of a Torn World” という英題は、多くの人が亡くなり、住まいが破壊されるなどした五大災厄に重点を置いていることを示唆している。漱石は『方丈記』の中でも特に長明の思想に関心があり、森口・ジェンキンスは長明が経験した災厄に注目して『方丈記』を読み解いたのだろう。

[訳 c' (熊楠、ディキンズ)] は「執心なかれ」という仏の教えを、聖書にある Thou や shalt を用いて “Thou shalt not cleave” としている。『方丈記』という日本の文学を英文学に引き付けることで、日本以外の読者の理解や共感を促そうとしたのだと考えられる。[訳 b (アストン)] と [訳 d (サドラー)] が和歌の英訳において<sup>(48)</sup>、英語の詩で用いられる押韻の技法を採用しているのも同様の理由だろう。一方で [訳 e (板倉)] は、和歌の英訳と原文のローマ字表記を併記している<sup>(49)</sup>。漱石と同じく原文との対応を意識しており、自国の文学を英語を媒体に伝えるという意図があったと推測できる。その点から言う

と、[訳 f (キーン)] は、原文の語感を保持しつつも、日本についての知識がない読者にも分かりやすい訳である。例えば、悲哀を表す語として挙げた「この風、未の方に移りゆきて、多くの人の嘆きをなせり。」は、“The whirlwind moved off in a southwesterly direction, leaving behind many to bewail its passage.” と訳されている。前半部「この風、未の方に移りゆきて」は、「未の方」を a southwesterly direction としている以外は直訳に近い。後半部は、「嘆きをなせり」を直訳しては意味が分かりづらいが、風が通り過ぎた跡に人々の嘆きが聞こえるという状況を説明し、嘆き悲しむ意の bewail を用いることで、「嘆き」が悲しみから来るものであることまでも表している。日本語や日本文化への造詣が深く、英語を母国語とするキーンだからこそ可能な訳である。

### おわりに

『方丈記』の英訳者の 1 人であるキーンは、『方丈記』について次のように述べている。

文体は、構造と語彙に漢文の影響を取り入れながら少しも硬さを残さず、日本語本来の叙情的流れを保って、比類なく美しい。列挙される災害の様子は、具体的で生々しい。(中略) 僧であるだけでなく、歌人としての修練も積んでいた長明は、目の前で繰り広げられる光景に敏感に反応した。そして、それを生き生きと伝える文章力もっていた。当時の読者は大いに心を動かされただろうし、それは現代の読者が読んでも変わらない<sup>(50)</sup>。

前に述べたが、漱石と熊楠には、翻訳に取り掛かる前から『方丈記』への関心があった。時代を超えた魅力は、『方丈記』に限らず、古典文学全般に言えることであるだろう。その中でも『方丈記』が際立っているのは、キーンも述べているように、文体の美しさ、物事の観察力とそれを的確に表現する文章力の高さであろう。熊楠にとって『方丈記』が心の支えとして大きな意味を持っていたことは既に指摘したが、多くの心情語の中で読者自身の心情にぴったりと対応することばかりが見つかることも、その理由の 1 つだと思われる。だからこそ、漱石が初めて『方丈記』を英訳した 1893 年から、最新では 2014 年まで<sup>(51)</sup>、何度も繰り返し英訳されてきたのだろう。心情語は複層的な意味をもつために、英訳者によって解釈の違いが明確に表れることも浮き彫りになった。

### テキスト

- ・ 築瀬一雄訳注 『方丈記 現代語訳付き』 角川書店 2012年
- ・ [訳 a (漱石)] : 夏目漱石 “A Translation of Hojio-ki with A Short on It” 『漱石全集』第26巻 岩波書店 1996年
- ・ [訳 b (アストン)] : W. G. Aston ‘CHOMEI AND THE “Hojoki”’ “A History of Japanese Literature” Heinemann 1899年
- ・ [訳 c (熊楠)] : 小泉博一、松居竜五、中西須美翻字 「南方熊楠『方丈記』草稿」 『熊楠研究』4号 南方熊楠顕彰会 2002年3月

- ・ [訳 c' (熊楠、ディキンズ)] : MinagataKumagusu and F. Victor Dickins 'Japanese Thoreau of the Twelfth Century' 『南方熊楠全集』第10巻 (『英訳方丈記・英文論考・初期文集他』平凡社 1973年)収録
- ・ [訳 d (サドラー)] : A. L. Sadler 'The Hojoki' "The ten foot square hut and, Tales of the Heike" Tuttle Publishing 1972年
- ・ [訳 e (板倉)] : 板倉順知訳 "The Hô-jô-ki: private papers of Kamo-no-Chômei of the ten foot square Hut" 大京堂 1935年
- ・ [訳 f (キーン)] : Donald Keene 'An Account of my Hut' "Anthology of Japanese literature, from the earliestera to the mid-nineteenthcentury" Grove Press 1955年
- ・ [訳 g (上田ら)] : 上田守稔、合田守緒、Gordon Mathews 英訳. 『英訳方丈記』富士書院 1988年
- ・ [訳 h (森口、ジェンキンス)] : 森口靖彦、デイビッド・ジェンキンス訳 『英語で読む方丈記』IBCパブリッシング 2012年

【注】

- (1) 'The Hojoki' A. L. Sadler "The ten foot square hut and, Tales of the Heike" Tuttle Pub. 1972
- (2) 矢部義之「英語発想法の比較研究—ドナルド・キーンと郡山直による方丈記の英訳に関して」『亜細亜大学教養部紀要』5号 亜細亜大学教養部 1970年11月
- (3) 森川隆司「英訳方丈記—漱石、ディクソン、そして熊楠」『工学院大学共通課程研究論叢』30号 工学院大学 1992年
- (4) 坂本文利「『方丈記』序段英訳についての一考察—漱石、熊楠、キーン比較の試み」『国語の研究』28号 大分大学国語国文学会 2002年11月
- (5) 以下、平岡敏夫、山形和美、影山恒男編著『夏目漱石辞典』(勉誠出版 2000年)の 'James Main Dixon' の項より説明を引用する。  
1856年4月20日～1933年9月27日。英語・英文学者。(中略)明治19年4月、東京帝国大学の英語・英文学科講師に就任。(中略)23年、2人目の本科生夏目金之助が入学。24年、その漱石に『方丈記』の翻訳を依頼し、漱石は短い論文を付した訳文を12月8日付けで提出。翌年、ディクソンはこれにまた論文を付して『日本亜細亜学会報』に発表した。
- (6) 文末に“K. NATUME”という署名とともに、“5th December, 1891”と記されている。
- (7) J M. Dixon 'A Description of My Hut' "Transactions of the Asiatic Society of Japan" vol. 20 1893
- (8) 『漱石全集』第26巻(岩波書店 1996年)収録の、“A Translation of Hojio-ki with A Short on It” に拠った。
- (9) エッセイ部に以下の記述がある。

In rendering this little piece in to English, I have taken some pains to preserve the Japanese construction as far as possible. But owing to the radical difference both of

the nature of language and the mode of expression, I was obliged, now and then, to take liberties and to make slight omissions and insertions. Some annotations have also been inserted where it seemed necessary. If they be of the slightest use in the way of clearing up the difficulties of the text, my object is gained. After all, my claim as regards this translation if fully vindicated, if it proves itself readable. For its literary finish and elegance, I leave it to others to satisfy you.

- (10) アストンの略歴については、楠家重敏著東西交流叢書11『W. G. アストン—日本と朝鮮を結ぶ学者外交官—』（雄松堂出版 2005）を参考にした。
- (11) “A History of Japanese Literature” は、紀元前700年以前から出版当時の1898年までの文学史を、時代ごとに論じている。
- (12) “A History of Japanese Literature” Prefaceより。原文は以下の通り。  
The Japanese have a voluminous literature, extending over twelve centuries, which to this day has been very imperfectly explored by European students. Forty years ago no Englishman had read a page of a Japanese book, and although some Continental scholars had useful acquaintance with language, their contributions to our knowledge are unimportant. Much has been done in the interval by writers of grammars and dictionaries, to facilitate the acquirement of this most difficult language, and translations by Sir E. Satow, Messrs. Mitford, Chamberlain, Dickins, and others, have given us interesting glimpses of certain phases of the literature. But the wider field has hitherto remained untouched. (後略)
- (13) 小泉博一「熊楠の英訳『方丈記』の草稿」『熊楠研究』4号 南方熊楠顕彰会 2002年3月
- (14) 岩上はる子「F. V. ディキンズと日本文学」（『熊楠 WORKS』41号南方熊楠顕彰会 2013年4月）より。  
アストンが1872年に『竹取物語』および『土佐日記』を英訳したのよりも、6年早い。
- (15) F. V. Dikins “Hyak Nin Is’shiu; Or, Stanzas by a Century of Poets, Being Japanese Lyrical Odes, Translated into English, with Explanatory Notes, The Text in Japanese and Roman Characters, and a Full Index” Smith, Elder (イギリス) 1866
- (16) 南方熊楠の略歴については、笠井清『人物叢書新装版 南方熊楠』（吉川弘文館 1974）を参考にした。また、“Nature” に掲載された英語論文の和訳は、松井竜五、田村義也、中西須美訳『南方熊楠英文論考 [ネイチャー] 誌篇』（集英社 2005）から確認することができる。ディキンズの略歴は、岩上はる子「F. V. ディキンズと日本文学」（『熊楠 WORKS』41号 南方熊楠顕彰会 2013年4月）を参考にした。
- (17) 小泉博一、松居竜五、中西須美翻字「南方熊楠『方丈記』草稿」『熊楠研究』4号 南方熊楠顕彰会 2002年3月
- (18) サドラーの略歴は、Australian National University（オーストラリア国立大学）の National Centre of Biography で編纂された“Australian Dictionary of Biography”を参考にした。書籍版は1966年から2012年にかけて全18巻刊行されている。インターネット

- ト上でも公開されているため、今回は web 版を利用した。(http://adb.anu.edu.au/)
- (19) 築瀬一雄編『校註 鴨長明全集』風間書房 1980年
- (20) 奥付には販売所が書かれており、「丸善書店、教文館、三越洋書部、帝国ホテル、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、其他」とある。
- (21) ドナルド・キーンの略歴は以下の著作を参考にした。ドナルド・キーン『日本を理解するまで』新潮社 1979年、ドナルド・キーン ドナルド・キーン著作集第10巻『自叙伝決定版』新潮社 2014年
- (22) ドナルド・キーン『日本を理解するまで』新潮社 1979年 p.59
- (23) 前掲書による。日本語の「花見」を例に、用語の不一致を指摘している。「花見」という言葉で花を見に行くだけでなく、花を身に出かけた群衆の様子までも伝える事ができるが、英語ではいくつも言葉を使って表現しなければならない。また、言葉が与える印象の違いの背景には、言葉の背景にある伝統の違いがあると述べている。
- (24) 上田守稔、合田守緒、Gordon Mathews 『『方丈記』試訳』『北海道自動車短期大学紀要』第10号 1982年9月
- (25) 上田守稔、合田守緒、Gordon Mathews 『『方丈記』試訳（続 その1）—他訳との比較研究—』『北海道自動車短期大学紀要』第11号 1984年9月
- (26) 『『方丈記』試訳』（『北海道大学紀要』第10号 1982年9月）では、上田守稔について脚注で「北海道薬科大学」とのみ説明している。
- (27) 『創立60周年記念誌 2003年～2012年のあゆみ』（北海道自動車短期大学 2013年7月）より。
- (28) 上田守稔、合田守緒、Gordon Mathews 『『方丈記』試訳』（『北海道大学紀要』第10号 1982年9月）の脚注より。
- (29) 上田守稔、合田守緒、Gordon Mathews 『『方丈記』試訳』（『北海道大学紀要』第10号 1982年9月
- (30) 原文の『方丈記』は、日本古典文学大系『方丈記・徒然草』（岩波書店 1980年）である。
- (31) [訳 g (上田ら)] の巻頭の序に記されている。
- (32) 『英語で読む方丈記 Visions of a Torn World』（森口靖彦、デイビッド・ジェンキンス訳 IBC パブリッシング 2012年）の訳者紹介より。
- (33) 京都を中心に発行されている非営利の雑誌であり、1987年から発刊されている。“Insight from Kyoto-Japan Asia” という副題の通り、日本だけでなくアジアにおける様々な問題、小説、詩、評論、フォトエッセイなどを掲載している。
- (34) それぞれの英訳の掲載の詳細は以下の通りである。
- 『梁塵秘抄』: Yasuhiko Moriguchi and David Jenkins ‘The Dance of the Dust on the Rafters’ “Kyoto Journal” 12号 Heian Bunka Center 1989年10月
- 『閑吟抄』: Yasuhiko Moriguchi & David Jenkins ‘The Song in the Dream of the Hermit’

“Kyoto Journal” 24号 Heian Bunka Center 1993年7月

『方丈記』: David Jenkins & Yasuhiko Moriguchi ‘The Hojoki-Anew translation’

“Kyoto Journal” 30号 Heian Bunka Center 1995年12月

- (35) 「無常観英文で 京の英語講師『方丈記』出版」京都新聞 1996年12月13日
- (36) 同上
- (37) 小泉博一、松居竜五、中西須美翻字「南方熊楠『方丈記』草稿」(『熊楠研究』4号 南方熊楠顕彰会 2002年3月)によると、熊楠邸には日本文学全書第2編が残されていたという。
- (38) 高杉一郎「日本古典文学の外国語訳について」『文学』第48号 岩波書店 1980年11月
- (39) 前掲論文
- (40) 漱石の『方丈記』への関心については、以下の文献を参照した。松本寧室「夏目漱石英訳『方丈記』をめぐる一漱石と長明」『二松大学院紀要』13号 二松學舎大学 1999年3月、増田裕美「夏目漱石と『方丈記』」磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社 2013年
- (41) 『漱石全集』第22巻(岩波書店 1996)より引用。
- (42) 松居竜吾「F. V. ディキンズ、熊楠間の交流と英訳『方丈記』の執筆」『熊楠 WORKS』41号 南方熊楠顕彰会 2013年4月
- (43) 前掲論文
- (44) 『方丈記』の諸本の分類は、築瀬一雄著作集2『鴨長明研究』(加藤中道館 1980年)によった。「『方丈記』の諸本に関する覚書—長享本の中から—」において神田邦彦は、本論文で採用したものと同様の分類をした上で、『方丈記』の諸本分類において築瀬氏の説が定着していることを指摘している。
- (45) 陳崗、吉田則夫「形態からみた日本語心情語彙の史的展開—語構成と品詞の観点から—」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』142号 岡山大学大学院教育学研究科 2009年10月
- (46) 前掲論文には、「心情」は、「人間の心的状態や心的動き、例えば、喜怒哀楽などを広く包括」し、「気質、知的活動また資格などの身体的感覚と区別される。」とある。
- (47) 以下、心情語について、筆者による和訳を適宜( )に入れて示した。
- (48) 『方丈記』の諸本には、巻末に「月影はいる山のはもつらかりき絶えぬ光を見るよしもがな」という和歌が記されているものがある。[訳b (アストン)], [訳d (サドラー)] では次のように英訳されている。

[訳b (アストン)]

The moon is gone—  
A cruel mountain-spur  
Where late she shone:  
Oh! That my soul had sight  
Of the unfailing light.



[訳 d (サドラー)]

Sad am I at heart  
 When the moon's bright silver orb  
 Sinks behind the hill.  
 But how blest 't will be to see  
 Amida's perpetual light.

[訳 b (アストン)] は、1行目の“moon”と“gone”が n 音で韻を踏み、2行目は“cruel”“mountain”“spur”と u が連続する。3行目は“she”と“shone”が sh で、4行目は“that”と“had”が a、“soul”と“sight”が s でそれぞれ押韻する。5行目は“unfailing”の2つの i と“light”が韻を踏む。

[訳 d (サドラー)] は、] 1行目が“sad”、“am”、“at”、“heart”と a で、2行目は“bright”、“silver”、“orb”と r および i で韻を踏む。3行目は、“sinks”、“behind”、“hill”の h および i で、4行目は“blest”、“be”、“see”の b および e で押韻する。5行目は“Amida's”と“light”の i で韻を踏む。

- (49) 前項の和歌について、[訳 e (板倉)] は次のように英訳している。

Tsuki-kage wa  
 Alas! How gloomy and lonely  
 Iru yama no hamo  
 It was to have the moonlight  
 Tsurakariki  
 Sink down the edge of the western mountain!  
 Taenu hikari o  
 Could I but gaze at her rays  
 Miru yoshi mo gana  
 For ever shining on the earth!

- (50) ドナルド・キーン著 土屋正雄訳 『日本文学の歴史4 古代・中世篇4』(中央公論社 1994年) p.259より引用。  
 (51) Meredith McKinney “Essays in Idleness and Hojoki” Penguin Classics (イギリス) 2014

(いなみ・みのり 千葉大学文学部日本文化学科2015年卒業)